

あを



2014



遠きミャンマー



インレー湖龍宮城は水浸し

佐藤喜孝

あそ

三 月

きのふの續き

佐藤 喜孝

東京

猿山の猿二匹つつ冬日和

冬木影象の背中に濃くありぬ

犀の臀きのふの續きの動物園

草の根につまづく象をおもひをり

始祖鳥のふた親の顔明けの春

原子爐を両手でつつむ雪女

原子爐につぎつぎ孵るメガネウラ



テレビで「ポーランドの里山」を見てゐた。ピエブジャ・アレフの広大な湿原を「ヨーロッパの肺」と云つてゐた。ヨーロッパにはいくつの国があるのだらうか。「ヨーロッパの肺」と聞いた時人つながりの地面が浮んだ。日本は島国と云はれてきた。世田谷では^{p25}が多量に観測されたと朝刊にある。海に囲まれた島国である事に日本は変はないが、一面大陸とを隔てる海ではなくなりつつある。例へば^{p25}にしても大陸からなんなくやってくることににより日本人への健康への影響が心配されてゐる。情報・人間も行き交ふ量も半端ではない。島国・島国根性といふ言葉も内容が変化し、死語化するかも知れない。

見やうによつては海は陸よりも障害物が少ないとも云へる。

はるの雪

篠田純子

東京

春動くジャズの流れる歯科医院

東京が雪國になる寝酒かな

裸木に何か下がってゐる静寂

西麻布 星条旗新聞社前

春埃米軍ヘリの太き腹

淡雪や喰はれた鳩のつばさ美し

私から上昇気流春の雪

何やらん黒き塊残る雪

寒 燈

定梶じょう

石川

まなこ剥く冬至日の出の鬼瓦

拍子木や叩けば揺らぎ寒銀河

わが夜汽車一再ならず冬木過ぐ

書庫にゐる司書補の大きマスクかな

網金の餅のふくれっ面愛す

チエーンソウ挽き止むしじま凍て山中

寒燈や賽銭函をのみ照らし

一月十六日、あの小野田さんが亡くなった。どんなひとだったのか確認の為YouTubeで映像を見てみた。心に残った言葉は「自分自身がしっかりしなければいけない。国なんてあてにならない。」

私自身はどうだろう？と振り返ってみた。主人や子供達をあてにしてばかり。仕事のせいにして怠けてばかり。寒いからと縮こまってばかり。そこでネットで知った「日だまり」という高価な肌着を買ってみた。これが暖かい。軽い。冬期鬱病も何のその。春が来たように活動的になり、気持も前向きになってきた。

小野田さんの奥さんの話の中で、雨音が屋根に打ち付ける夜、「小塚、雨はつらいな。」と寝言を言っていたという。亡くなってやっと、戦争が終った。

文語「ちりばむ」には「語あつて漢字で書けば「鏤む」と「塵ばむ」。

池内友次郎に「冬の星エッフェル塔に鏤めり」があるが、「鏤めり」は誤り、ということになる。しかし余り違和感を覚えないのは、音が「塵ばむ」と同じだからだろう。

「塵ばめり」と言えるわけだから。しかし近年の地方紙の投句欄、大手結社の主宰者が選者なのだが、青ざめり、現れり、見れり等々、読むに堪えないと言つていい句を佳しとしている。

以前に、国語教師の方が見かねて投書欄に一文を投書したけれども没だった、と伺ったことがある。

結局互いに、程度に合った選者程度に合った新聞社、ということなのであろう。

☆

須賀敏子

埼玉

自転車の力士に会ひし福詣
読初の日本国憲法声に出し
巻きぐせが直らぬままに新暦
冬ぬくし能登演劇堂扉開く
雪吊が雪待つてゐる兼六園
ころんでも又ころんでもスキーの子
ベランダの切干大根こがね色

春 祭

竹内弘子

埼玉

キリストの半裸まぶしき春祭
木枯のきのふと過ぎし鯀そば
水暮れて青鷺重く飛びたてり
笠地藏蹤いてくるなり落葉道
一人よし二人またよし叩き鯨
鯖鮓や声に歳の知れる憂さ
島椿ひとのいまはの海の景



☆

田中 藤穂

東京

寒薔薇励まし合って開きけり
除夜の鐘十ほど聴いて床に入る
瑛菜0才抱かれて笑ふお正月
大皿に金目鯛ある伊豆の夜
この先に狸の巣あり枯葉山
賀状またみては心をぬくもらす
いそいそと七種の菜を買ふに出る

七日粥

長崎 桂子

三重

柚子風呂に思考全く消果てる
千両や部屋に祝賀を漂はす
裸木の並木に遊ぶ半ズボン
闇深むh木木打ち鳴らし風冴ゆる
七日粥昨日はもはや思ひ出に
髪染めず傘寿越えたり初祓
小正月一菜ふやす赤ワイン

近くの医院へ薬を貰いに行ったら、
あとから私より少し若いお年寄りが
入って来た。「今日の風は寒いです
ね。」と言葉を交す。「エアコンの風
が私の向うへいつてしまうので直し
たいのですが器械に弱くて。一人暮
しだもんですから」という。「それ
はね、風向という所を押すと羽根
の角度が変って直せると思います
よ。」という、「そう、風向風向」
と繰り返した。全く独り暮らしの老人
はちよつとしたことで不自由したり
不安になったりしている。それに政
治でもファッションでもやたらと横
文字が横行して、益々年寄に解りに
くくなってゆく。

あの一人暮らしのお婆さんはエア
コンの風向をなおせたかなあ。

一月二十日 大寒に入る日に

年も改まった一月七日の零下四度
はこの土地で初めて体験する事で、
その後やって来た今年一番の寒波は
西高東低の気圧配置で骨身に染みる
寒さは、毎日の生活にあれこれとか
なりの影響が出て来て、全く意気消
沈した日日でした。
少し和らいだ日に近くの桜の堤防
を歩いたら、紛う事もなく冬芽が、
若木にも老木にもぽつぽつ脹らみを
擡げていた。
過し良い日が一日も多くあります
よつに。

年の暮

早崎泰江

埼玉

冷凍のおせち届きぬ大晦日

何処からとなくかすかに聞こゆ除夜の鐘

真剣におみくじ見入る受験の子

枝先に冬芽ふつくら額あぢさゐ

ふきなびきけむるがごとし枯芒

老人ホーム通る度殖ゆ水仙花

さくさくと霜柱踏むころよし

櫟

森理和

東京

櫟や母の針箱ボタン付け

櫟や母の飯台弛み無し

冬枯れの軌道交叉の葡萄蔓

初富士のネットに受信旅どころ

思ひには分け入り出来ず海鼠かな

兄二人送り内々薄雑煮

昼も夜も電話に出ない十一月



正月

吉弘恭子

東京

ふかぶかと腕のみこむ柚湯かな

触れなむで酸いもあまいも蜜柑かな

一步離るさざんかの白見そなはす

片足を右足にのせ足袋鞋

遠に聴く訛りなつかし初鴉

初下ろし細き柂目の利休下駄

春や鳴き声こぼす寒鴉

寒鰯

赤座典子

東京

離れぬ子抱えしままの礼者かな

年玉に成人までねと一筆箋

継続の力とならず初句会

冬暖モネの世界の非日常

「再値下げ」セーター一枚迷ひなく

冬夕焼車内にひびくオラトリオ

寒鰯の薄き朱色に透きにけり



お正月実家に帰った友人から鰯の半身が送られてきた。

弟さんが千葉の小湊で漁師をしている。何故か暮れから鰯が大漁でここへきて八本も一度に獲れたそうである。近所に配つてもまだ余り、我家へも送ってくれた次第。獲れたての半身は、船で使うという塊の氷に包まれて冷蔵だった。

早速頂いた刺身は、最高であった。翌日妹たちとのしゃぶしゃぶでも大いに喜ばれた。

一度氷見に行きたいねと話していたが、望みが叶ってしまった。

残りを切身とし他にも配ったりしたが、まだ鰯大根にする分が冷凍庫で出番を待っている。

お陰様で大変贅沢な思いをさせていただいた。

☆

井上石動

山梨

居残りの夜の白雲沈丁花

雪の中まちがつて春来りけり

はみだして足九文半春炬燵

かさ増せる信濃小流れねこやなぎ

そこかしこ満つや梅の香城下町

指の背になづる土偶は臍の夜

これがまあまことか五尺春の雪

孫の手

大日向幸江

埼玉

凍蝶のしろがね色の白日夢

孫の手に大き夢あり初日の出

初買の卵二箱紅淡く

大寒や五感のすべてゆるびをり

浅き夢いくつも見るや感冒の夜

堀炬燵練炭の香の甘きこと

山積みの白菜年金支給の日

五輪雑感

71年夏、霧ヶ峰高原市営運動場の整備を、先輩と二人で。

厳冬を経た地中の石塊が浮き出してくる。それを整地。

ぬかるんだ日は、学生バイトである私たちが「使用禁止云々」を決定。

時に、ここを使用していたのが、

翌2月札幌五輪の距離スキーとスピードスケートの代表候補選手たち。

女子ですら80きぐらいのバーベルを上げる彼らにとつて、か細い学生さん

の肉体労働が「可笑しかった」のであるうか、同宿の彼らにはとても

可愛がって貰った。その中の一人が五百m日本記録保持者の幸子さん。

弟のごとく可愛がってくれ、その後もお付き合いを続けた。

(34頁へ)



大 寒

木村茂登子

神奈川

マスクして素知らぬ顔で通り過ぐ

野良猫に怪しまれたる日向ぼこ

初霜や腐葉土も今朝薄化粧

大寒や動くものなく空真青

面取れば美少年なり寒稽古

初場所やご鬚眉綱をとり逃す

初場所も千秋楽や撥納

☆

齊藤裕子

東京

生きてをり子等と食積喰うてをり

初日射す庭の万両たわわなり

踏み崩せば昨日より長し霜柱

頼むよと我身を摩る春隣

傍らに子くれし句帳春を待つ

祈るよに待つCT結果春隣

病して御蔭様増ゆ春隣

一月廿日大寒。真青な空に雲一つなく、風もなく暖かい日であった。

この日生ゴミ収集の後、ネット回収の当番に当たっていた。

その日、普段二時頃に来るはずの集塵者が時刻に來なかつたので、日向ぼっこをして待つことにした。

通りかかった近所の方々とその都度立話をしたり、また飛び出して来た野良猫としばし睨めっこになったりしているうちに陽が陰りはじめた。

結局二時間位待ちぼうけさせられたことになった。

そんなことは滅多にないことである。

この日係の方が作業を終了したのはそろそろ薄暗くなる頃ではなかつたかと思われる。

鹿児島で育ち暮らした年月、元旦になるといつも庭に出て、父と一緒に四方拝をした。というかさせられていた。我家だけの儀式だったのかその頃どこの家でも行われていたのか定かではないが、父を真似て同じ方向を向き柏手を打ちながら四方拝をすると敵かな気分になるのだった。

年の瀬になると、父は山から竹と松を伐ってきて庭の入口に門松を立てた。冠岳かんたけという高い山に行く途中に白砂台地を掘削する場所があり、毎年そこから白砂を貰って来た。大晦日の夕方になると、子供達に庭掃除をさせ、父はその白砂を庭全体に撒き新しい竹箒で均していった。几帳面な父の仕事は丁寧で、我家の庭は一年で一番きれいな庭になるのだった。それは元旦の四方拝への大切な準備作業だった。そして、父の一年の仕事は白砂撒きで完成するのだった。

四方拝も白砂撒きも、嫁いでは縁のない行事になったが、正月を迎えると甦る、父との懐かしい思い出である。

歩道から浅瀬に入るやうに冬 佐藤喜孝
 山茶花のふうはり包む蕊の色 斉藤裕子
 青年の晒のまぶし寒襖 篠田純子
 バスがもう来る頃師走夕やけて 定梶じょう
 「会いたい」と書く年賀状会へぬまま 須賀敏子
 ひと片食ぬいてすがしき小正月 竹内弘子
 法案強行夜の底冷のとめどなく 田中藤穂
 夜半叩く鈴鹿山風雪催 長崎桂子
 山茶花や庭の箒を新しく 早崎泰江

空っ風幼の後を追ひ続け 森 理和
 山茶花を切る手ごつごつしてをりぬ 吉成美代子
 木枯一番赤い袋の痛み止 吉弘恭子
 初詣常と変らぬ願ひ事 赤座典子
 穢事万事恐懼謹納除夜詣 井上石動
 冬空に万才をせる辛夷の芽 大日向幸江
 小春日や左右穿き違へてゐる子供 木村茂登子
 吉宗のあびしいちやうももみぢかな 吉弘恭子



二月作品より

木村茂登子・佐藤喜孝

彩雲は人しれずあり冬の街

佐藤 喜孝

彩雲とは、虹や暈、ブロッケン現象などが織りなす自然現象の一つで、山ではよくみられるという。これは瑞祥と思われるをり、練香のめいにもなっている。街で彩雲を見る機会はありませんかと思う。あつたとしても気付かない人が多いのではないかと思う。私が夕焼の空にそれかと感じた時は釘付けになってしまった。

一句は一見静かにありのままの風景を詠んでいるようであるが、作者の心中には何か深いものがあるように思われる。(茂登子)

青年の晒のまぶし寒褌

篠田 純子

齒切れの良い句である。作者はこの寒褌の行

事を近くの神社で見たと述べている。私も以前僧侶の水垢離の行事を見たことがある。見物の方が震えてしまうような厳しい行事である。締込姿の威勢の良い男性の勇壮な姿は祭の折などに見ることが出来る。晒しのキリリとした白さを際立たせる男の逞しい見事な肉体も同時に想像出来る。それを晒のまぶし、と表現した。巧みな表現である。(茂登子)

バスがもう来る頃師走夕やけて

定梶 じょう

会員の希望で作者名に地名を今月から付けた。以前地名を付けてゐた時は最終交通機関の駅名や停留所名を付けてゐた。何の意もないが今回は素直に都道府県名にした。「劔地東出」はその折のじょうさんの地名である。「つるぎぢひ

がしで」はバス停の名前であらう。バスは時計代りにもなる生活の必需品である。バスへの思ひと風土への思ひが伝はってきた。(喜孝)

紫陽花の葉のはらはらと十二月

須賀 敏子

雨に濡れて幾度か色を変えて楽しませてくれる紫陽花も盛りを過ぎて半枯れとなると、見るも無残な姿となります。しかしそれも過ぎてドライフラワーともなればまた見るべき姿となります。やがてその葉も地に戻ってゆく。師走の慌しい一面、メランコリックな思いの伺える一句です。(茂登子)

年つまる六分の出来で良しとする

長崎 桂子

全く同感です。あれもこれとも思いますがなかなか全部を達成することは至難なことです。完璧に出来なくとも良しとしましょう。あまりキチキチとすると他人にも厳しくなってしまう

ます。自分にも他人にもすれすれを与えない生き方がよろしいようです。(茂登子)

温もりに魅せられて踏む落葉かな

早崎 泰江

陽の匂いをいっぱい抱えこんでいるフカフカの落葉は足裏に心地良い感触を与えてくれます。枯れたもののやすらかさと温もりに触れ、幼い子供の頃にかえったように一瞬無邪気になる。

読むものもやさしくなれる一句です。(茂登子)

あんぱんとホットコーヒー優先席

赤座 典子

優先席とは、典子さんがそう思っている行きつけのお店の席のことでしょうか。あんぱんは時々食したくなる地味ながら息の長いヒット商品です。もうだいたい以前のこと、銀座に出た折、木村屋に立寄りました。二階が喫茶室になって

いて殆んど満席状態の中、目立って瀟洒な中老の紳士が一人であんぱんを召し上がっていらっしやいました。

この一句に接した時、かの時の紳士と典子さんの姿が重なり合って見えました。(茂登子)

吉宗のあびしいちやうももみぢかな 吉弘 恭子

増上寺から東京タワーへは上り坂。訪れた時は黄葉の盛りであった。古地図で見ると松平陸奥守・松平肥後守・松平隠岐守・松平大和守などのお屋敷と増上寺の間の坂を上る事になる。徳川將軍のなかでも吉宗は面白可笑しく題材にされて知られてゐる。ほかの將軍はともかく吉宗なら浴びたであらうとは、さもありませんといふ句である。またさういふことがすんなりと思はせる雰囲気を保つてゐるところであった。日常といつとき離れ、時空のなかに遊んだ一句。(喜孝)

あをキーワード俳句辞典(きちーきぬ)

きちんと

麦ごはんきちんと食べて日向水 篠田 純子
白木槿きちんとたたみ散りにけり 篠田 純子

喫煙

炎天下耐へて無言の喫煙所 鎌倉喜久恵

気付く

大晦日気付けばしんと茜富士 早崎 泰江

吉日

吉日を選びて雛を飾りけり 森山のりこ
おもひだしたやうに賀状の着く吉日 竹内 弘子

屹立

残雪や水晶のごと屹立す 赤座 典子
猫の子に墓碑の屹立啼きにけり 定梶じょう
新宿靈天和金剛屹立す 佐藤 喜孝
屹立のビル手の内に冬もみぢ 篠田 純子

汽笛

汽笛鳴る地底が呷く台風来 関口 ゆき

俳句界 2014年4月号

毎月25日発売
定価1000円(税込)

わが青春の一句

《特集》
初学の目標、憧れだった古今の名句

能村研三 大高霧海 森田純一郎
田島和生 豊田都峰 寺井谷子
辻桃子 田中陽 古田紀一
橋爪鶴磨 中村正幸 早川翠楓
水見壽男 河内静魚 岸本マチ子

タラシク 俳句界NOW 西池冬扇

作品 岸原清行 松村多美 大野鶴士

シリーズ 結社の未来を考へる 若手座談会

次代を担う30代有力俳人に聞く

大谷弘至「古志」主宰 鎌田 俊「河」副主宰
高柳克弘「鷹」編集長 日下野由季「海」編集長

◆おとなのエッセイ

青柳志解樹 浅井慎平 赤羽建美 他

発表！ 第13回山本健吉賞 深見けん二

※セレクション結社「笹」山本一步

私の二冊 和久田登生「層雲」

魅惑の俳人 岸風三樓 *インタビュー
山崎ひさを

対談 佐高信の甘口でコンニチハ！
香山リカ (精神科医)



※一部変更の可能性あります。

株式会社 文藝の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

わが敬愛する俳人たち

―百日紅乙女の一身またたく間に 草田男―

阿部寒林

石田 波郷

旧木場（深川）に勤務していた頃、（昭和二十年代）どういう気持ちで波郷先生に会いたくなったのか今思っても思い出せない。恐らくここ木場から自転車で行ける距離に波郷先生が居られるという親近感が自転車を漕がせたのかも知れない。先生は砂町に住まはれて居たが、この辺りはついこの間までは「砂村」と謂はれていた町である。木場の古老の中でも砂村という人が何人か居たのを覚えている。又、尾崎士郎の「人生劇場」でも登



旧葛西橋（右奥に新葛西橋）

場する村である。先生のお宅の所番地を何かで知ったから急に思い立ったのかも知れない。

立春の米こぼれをり葛西橋

波郷

この橋を渡れば行徳・浦安で戦前は鮎釣に行つたものである。この橋はずつと下流に移されて今はない。当時はこの道を葛西橋通りと称んでいた。この通りが深川の東陽町の方面から亀戸方面へ行く四ツ目通りと交叉するところ、ここが境川とい

いすぐのところが小名木川の貨物駅で踏切となつていた。先生の名句

貨車寒し百千の墓打ちふるひ

波郷

を生んだ。

踏切のすぐ手前、通りより一段と低い所にあき子夫人の実家があり、その裏手が先生宅であった。清瀬から退院されて数ヶ月の先生は弱々しかつたがよくお話をしてくれた。先生の間は本棚とその前のベットで占められ、その前に胡座をかいて談笑した。ぼくが誓子門ということを知っておら

れたので初対面とはいえ緊張感など全く無かつた。この時に持参した色紙四枚程、快く書いて頂いた。句はみなぼくの好みの句でお願いした。恐らく一時間弱位のことだったと思う。この色紙は今日、雲版の中の時は玄関を飾ってくれている。

二回目の訪問は木枯さんを同行した。先生は「現代俳句」を創刊、責任編集者となっていたので木枯さんの名だけはよく知っていた。どちらかと言へば寡黙がちな木枯さんに先生は言葉をかけられたのを覚えている。ぼくたちが突然訪問したので偶々来られていた石川桂郎氏に迷惑を掛けたようになり桂郎氏は日向の縁側の方へ遠慮してくれた。俳縁とは面白いもので後年この桂郎氏と新宿「ボルガ」での談笑相手になるのだった。

波郷先生は新聞の江東版で「江東歳時記」と題して随筆を連載されていた。今想像しても胸が痛くなるような一文を書かれていたのを覚えている。それは持病の肺の手術の一文であつたと思う。胸部を割いて肺にプロンベというピンポン玉位の合成樹脂の玉をいくつも押込める手術。その

手術後の安堵感による一文が掲載されていた。その後先生は清瀬との入院を繰返しておられていたが、当時の朝日俳壇選は高熱中でもベットで選をされていたのである。これは相当額の選句料が医療費となっていたから相当無理をされていたと想像し痛々しい思いを今でも思い出す。この時の選者は草田男・誓子・楸邨・波郷の四名だったと思う。以前の朝日俳壇は新聞の一面にカットのように掲載されていたが選者は虚子一人で十句掲載であった。如何に今の各新聞の俳句欄のレベルが低いのに驚く。

波郷居が練馬区の高野台に移られたことは相当経ってから知ったが、戦後の砂町時代以後にお会いする機会は遂になかった。いまここに結果的には遺句集となった『酒中花』がある。東京美術から昭和四十四年四月十五日発行となっているが先生の後記は極く短く（昭和四十三年三月）『清瀬の病室にて』となっている。この『酒中花』発行の年の（昭和四十四年四月十五日）秋十一月、波郷先生は逝去されたのだ。聞くとところによると

高野台の御自宅もいまは他人の手にわたっているとのことである。ぼくはまだ体調の良かった三年程前、四、五年ぶりに深大寺を訪れ波郷先生の墓詣りをした。筆太のしっかりした文字で「石田波郷」と横書きの墓であった。砂町以来、此処で何十年という空白を埋める思いで合掌、「延命十句観音経」を唱えつつづけていた。

蛍籠われに安心あらしめよ
人はみな旅せむ心鳥渡る
元日の日があたりをり土不踏
息吐けと立春の咽喉切られけり
わが死後へわが飲む梅酒遺したし
今生は病む生なりき鳥頭
「酒中花」以後の遺句



上 新旧の葛西橋
下 葛西橋付近風景
一九六二年九月一日撮

自詠自読

冬立てり南無喝羅怛那多羅夜耶

篠田純子

平成二十四年九月に母が亡くなった。同年十一月三日に納骨が行われ「ナムカラタンノートラヤー」のお経があがった。何かホツとした。もう両親はなく、私は逆縁の不幸も無くこれから堂々と死ぬると思った。

法要の帰り道、一人で歩いていると反原発のデモに向いある団体が拡声器で抗議の言葉を発している。街宣車の前で若い男が腕組みをして警官と睨み合っている。着物の喪服姿の私は発作的にその間に入り私も腕組をして若い男に対峙した。「ムッ」としてたようだが、若い男は私に手出しはできない。なぜなら私の背後には五人程の警官。私を殴ったら

現行犯逮捕だ。悔しそうな若い男に私の溜飲は下がった。私は優しく警官にエスコートされその場を去った。

親は亡くなったが孫がいる。命は惜しまねばと思った。

嬉しげに子に手をひかれ小春かな 斉藤裕子

小春日に、高齢の親を子供が手をひいて散歩している。手をひかれた親は嬉しそうに笑っている。それは高齢であればある程、微笑ましく見える光景かもしれない。主人の母もそうだった。散歩に連れて行く時、自分から主人や私に手を預けた。知り合いに会うと嬉しそうに話しかけた。いつも家族に大事にされていると言った。それは母の自慢でもあり、希望でもあったのだろう。

ご近所に植木や花の好きな、私達より少し年輩のご夫婦がいて、時々立ち話をしたり、草花や植木を

交換したりしていた。奥さんを全然見かけないなと思っていたら、ご主人に手をひかれて病院に行くのに出会った。後日ご主人から脳腫瘍で手術もできず余命六ヶ月と宣告されたと聞いた。ご主人も癌の手術をされて闘病中と聞いていたので、何と声をかけたらいいか分からなかった。その後彼女は自宅で療養しているらしく、ご主人が料理から入浴の世話までなさっているという事だった。ご主人の看護の甲斐あって、病院へ行く日や陽気の良い日、彼女はご主人と手をつないで、ゆっくり歩いて我家の前を通る時があった。私も庭に出ている時は、「元氣な顔を見られて嬉しい。」と声をかけた。沢山のおしゃべりはできなかったが、声をかけるといつもよく喜んでくれた。

その後、我家も主人の名古屋赴任、病氣退職等々、いろいろ重なり、会う機会もなくなった。東京へ戻ってから、彼女の事は気になっていた。

ある日、二階のベランダで洗濯物を干していると

ご主人ではない人に手をひかれた彼女の姿が目にとまった。彼女の表情は嬉しそうに見えた。立派な体躯の頼もしい感じの息子さんだった。その時の彼女の本当の気持は分からない。子供に手をひかれて歩く事などまだ想像もしていなかったと思う。しかし小春日和に、ご息子と手をつないで歩く彼女の表情は明るく、わたしはその光景にこころがやすらいだのである。

その後看病していたご主人が先にお亡くなりになった。発病から三年経った現在、彼女は優しい二人のご息子と、一人の娘さんに見守られながら御存命である。昨年の暮れ、久しぶりにご息子と一緒に彼女を見かけた。私は思わず駆け寄って声をかけ、自分も癌の手術をして闘病中である事を告げ、涙を流して励ましあった。

人生何が起るか分からない。思いがけない事がふりかかってくる。私も夫や子供達、多くの人達のお陰で大手術を乗り越え闘病中である。子に手をひ

かれるのは、まだまだ遠い先になるよう願ってやまないが、その時がきたら、感謝して嬉しそうな顔を
して子に手をひかれないと思う。

木枯や中野坂上駅を出て

田中藤穂

佐藤代表のお宅の近くの明德稲荷や、小川苑という集会所で行われた七座句会では、夜の六時からで、八田木枯先生・阿部寒林先生・時には堀内一郎さんも見えられた。

鈴木多枝子さんはご近所で、いつも出席されて会計係をして下さった。芝宮須磨子さん・芝尚子さん・松村東亜未さん・森理和さん・大山夏子さん・みな私より古くからの仲間だ。お夕食は代表夫人の恭子さんが腕を振るっていろいろ作ってくださり、暖かいお汁までお家から運んでくださる。それに理和さんの糠漬けが加わる。お酒もビールもある。クリスマスには傳からケーキがとけられる。私は主

人が亡くなって一人暮らしが始まり、ようやく夜なども自由に出かけられる身になった時で、俳句も楽しいが、皆さんと賑やかに会食するのがどんなに楽しかったか……まだメンバーには綾子さん・純子さん、時には純子さんの息子さんの大佳君・安達房代さん・敦子さん等々。木枯先生はいつもにこにこ、飄々と、温かい適格な評をくださるのは有難いことだった。

和氣藹々だったあの会は、佐藤御夫妻の献身的な御好意と御努力の賜と深く感謝している。

私は五時少し前に家を出て、新宿で地下鉄にのりかえて中野坂上駅へ行く。プラットホームからエスカレーターを上って改札を出ると、東亜未さんが尚子さんを待っていらしたりした。中野坂上へは丸ノ内線でも大江戸線でも行ける。地下鉄から地上へ出ると、青梅街道と山手通りの交わる広い交叉点へ出る。夏だともまだ明るくて、会場のある中野警察署の方へ向って歩いてゆくと、真向いに夕日が落ちかけ

ていて、街全体がモノの絵の様に滲んで美しかった。月一度の会なので月毎に風景も変る。冬はもう新宿に着く前に暗くなる。でもあの中野坂上のあたりのビル街は不夜城のように明るくて、暗いのは甲斐犬を扱う犬屋の角を曲がってからの少しの間である。私は駅を出たところで木枯先生とばったりお逢いしてご一緒したことが二度程あったが、先生は私より二つ三つ年上でいらした筈だが、背筋は伸びていらつしやるし、歩くのもさつさと早い。あれは二月の句会の時だったろうか。「また春が近づいて、春はよい季語が沢山あるから、胸がわくわくします。」とおっしゃる。「ああ、そうでなくてはいけないのだわ。」と、私はとても大切なことを教えて戴いた気がした。

あの道は私の足では十分ちよつとかかったと思うが、句会が終わっての帰り道は皆さんと一緒に楽しくお喋りしながら、中野坂上駅まで歩いた。

後に、中野坂上駅近くのジョナサンで連句の会を

やったことがあった。その時はそれぞれ勝手に好きなものを頼んで昼食をいただき飲み物などいただいて、随分長居したが、お店の人は親切で嫌な顔もされず楽しかった。ある日は交叉点を渡る時、押し戻されるような強風で、髪ぼうぼうで到着したこともあった。その後連句の会も中断したままなので中野坂上駅に降りることも暫くない。

多枝子さんが急死なさり、木枯先生も一郎さんも今はもうこの世にいらつしやらない。みんな年齢を重ねていろいろなことが起こった。木枯や中野坂上駅を出ての一句は、私の心の中に刻まれた中野坂上駅をめぐるいろいろな思い出によって出来たものです。

“木枯や”と木枯先生を結びつけるのは失礼に思いますが、木枯先生への感謝や懐かしさも一句の底に秘められております。お寛恕ねがいたいとおもいます。

(16頁より)

彼らと接して思ったことそれは一流人になればなるほど、心も態度も、素直で清らか。距離スキ一の弘子さんなど、我々の「使用禁止」に素直に従い、域外で練習を繰り返し。

そんな姿を見るからこそ、必死にグランドを整え、少しでもお役に立てば……と。

結果、幸子さん9位、弘子さん24位、その他のみなさんもメダルはおろか入賞にも届かなかった。

しかし、彼らの壮絶練習を見ている私は、頑張ったね……と。

その道の一流たる人に学んだはずでありしが、その後の私と言えば……と、五輪の都度の慚愧。

あとがき

じょうさんの文章で勉強してゐる。一月号の「妹がり」と「妹のがり」の時も早速辞書をひらく。「がりー人を表す名詞に助詞「の」を介して

付き、「その人の許に」の意を表す。」とあった。フムフムとうなづく。わたしもいつのまにか妹がりと思ってしまうてゐた。今月はちりばむ。これも辞書で確認、フムフム。文中「現れり」も檜玉に挙ってゐる。わたしも使ったかも知れないと慌てて調べる。「あを」に一句有った。「ホトトギス」にも〇〇にも。早速「秋霖や蜘蛛の巣きりり現る」とデータベースを改めた。

(喜孝)

二〇一四年三月号

発行日	三月五日
発行所	東京都中野区中央2・50・3
電話	090・9828・4244
ファックス	03・3371・4623

印刷・製本・レイアウト

カット／恩田秋夫・松村美智子 竹僊房

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替

00130・655526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。